郊外ニュータウン居住者における初詣行動の多様性
ー“全国民的な行事”初詣の地理学的理解に向けてー

卯田卓矢（名桜大学）

本発表は茨城県常総市のきぬの里を事例に，郊外ニュータウン居住者における初詣行動について検討した。地域における初詣行動を扱った研究では，来住時期が新しい住民ほど氏子意識が希薄であり，地元外の社寺を初詣対象とすることが指摘されてきた。この点は本発表の研究対象であるきぬの里においても当てはまる。きぬの里は市街地および農村地域との比較から，他地域で全体の4割以上と高い割合を示した氏神への初詣が1割未満と低くかった。当地域は分譲時期が近年であり，来住時期が新しい住民が多く，地域内の神社との関わりは希薄である。そのため，居住者は氏神ではなく，「自宅近接」や「有名な社寺」などの理由から，「市内」を中心に「県内」，「県外」の社寺へ初詣を行っていた。

次に以上の点を踏まえ，きぬの里居住者の具体的な初詣行動を検討した。その結果，行動には大別してきぬの里来住後に初詣対象を変更した者と，来住後もこれまでの初詣のスタイルを踏襲する者が存在した。そのうち，前者は転居地ごとに周辺の有名な社寺へ初詣を行う傾向があった。また，これら居住者は初詣対象の探索方法として近隣住民からの情報を重視するが，その際，きぬの里は近隣住民の多くも転入者であり，住民自身も周辺社寺についての十分な知識を持ち合わせておらず，結果として近くの有名な社寺を紹介する傾向があった。そして，そのことでさらに有名社寺への初詣者の集中化が促されていた。この点は転入者が多くを占めるニュータウンの行動特性の一つと捉えられる。

一方，後者については三つのパターンが確認できた。すなわち，きぬの里と実家や前住地との近接性からこれまでと同じ初詣対象を選択する者，居住先や社寺までの距離に関係なく，自らの明確な祈願内容から初詣対象を変更しない者，実家の帰省時に実家近くの社寺へ初詣を行う者である。きぬの里ではとくに第1の居住者が多かった。この背景には近接地域からの転入者が多くを占めるきぬの里の特徴が関係している。つまり，実家や前住地が近いことで来住以前からの初詣のスタイルを踏襲することが可能であった。また，第3の行動についても分譲時期が近年であるきぬの里の特徴から，現在でも遠方の実家やその周辺の社寺とのつながりを維持する居住者が少なからず存在していると推察された。

以上，きぬの里居住者の多くは地元外を初詣対象としているものの，具体的な行動をみると，以前の初詣対象を参詣する者が存在し，そこでは前住地との近接性や明確な祈願内容，また実家とのつながりなどから居住者個々において多様な行動がみられた。とくに，ニュータウンでは様々な地域からの転入者が多く居住していることから，その傾向が顕著であると考えられる。したがって，人口移動が進行した戦後の初詣行動を解明するためには，先行研究において論点とされた氏神との関係の変化や非地元神社化だけでなく，本発表で明らかにしたような多様な行動パターンについても関心を向ける必要がある。